

## 政治倫理・道徳教育と農業

北海道大学教育学部 助教授 鈴木 敏正

### 「金丸逮捕」政治倫理

三月七日づけの各紙には、元自民党副総裁・金丸信氏とその第一秘書であった生原正久氏が逮捕されたというニュースが大きく報道されている。

金丸氏が佐川急便から五億円の違法献金をうけたことが発覚し、たった二十万円の罰金という「略式命令」で終わったことは耳目に新しい。今度は、それとは別に八億円の所得を隠して四億円の脱税をしていたというのである。生原氏は四億円の所得隠し、二億円の税逃れである。隠された所得の大

半は割引金融債にあてられていたらしいが、その額といい、その方法といい、ほとんど庶民感覚を越えている。金丸氏が仕切っていた竹下派は分裂し、いま政治改革が

国会の焦点となっているとはいえ、果たして現政権にどれだけの自浄能力があるのだろうか。これまで政治倫理が何回も問題にされながら、そのたびに裏切られてきているのである。

### 大人が道徳的でないときに 子どもは道徳的たりえない

しかし、われわれにとってさらに腹立たしいのは、このような権力者にかぎって、道徳とか倫理をふりかざして教育の世界にも大き

な影響力を及ぼしてきたことである。「生涯学習体系への移行」をスローガンとする現代の教育改革は、キングメーカー・金丸氏の代

表的作品である中曾根政権の諮問機関であった臨時教育審議会からはまったのであるが、その学校教育改革の最大の眼目のひとつは道徳教育の強化であった。

たしかに現在の学校の現場では道徳教育を強化せざるをえないような実態がある。非行や校内暴力、いじめと登校拒否、時代はなれた校則と体罰、これらのことが毎日のこと々々マスコミで報道されている。もちろん、これらは学校の中だけの問題ではなく、たとえば最近の親の子殺しに対する判決や、少年テレビゲーム窃盗団の事件などは、家庭も地域も一体となって道徳教育に取り組むことが必要であることを考えさせるものがある。

だが、大人や大人のつくっている社会が非道徳的であるとき、はたして子どもに真の道徳教育ができるのであろうか。子どもが非行や「逸脱行動」におよびるときには、そのまわりに必ず非道徳的な環境がある。生涯学習政策をすすめる文部省は、リクルート疑惑の主要なルートのひとつであった。最大

の権力者が非道徳的であり、むしろ非道徳的であることによって日本の「指導者」となるという構造

## 道徳教育の

### ありがたをめぐって

もちろん、日本における政治的指導者が非道徳的であるからといって、教育の第一線にたつ教師が非道徳的であるわけではない。問題にすべきは、道徳教育のありかたである。

これまで日本の道徳教育を長い間支配してきたのは徳目主義である。国家や教育者が必要だと思われる徳目を子どもに内面化することが課題とされてきたのである。このような考え方は、しばしば国家主義的な理解に陥りやすい。戦前の教育を引き合いにするまでもなく、中曾根元首相流の教育論を思い起こせば理解できることである。

これに対して、アメリカの功利主義的新教育に代表される考え方は、価値主義であった。道徳教育

があるかぎり、道徳教育は成立しない。

において大切なことは、何が道徳的価値として重要であるかを選択できる力を子どもがつけることである、と。いかにも自由主義的な発想である。ただし、こうした考え方は、何が道徳的なのかという肝心な点について教育することができない。

## 農業を大切にしない

### 政治は非道徳的になる

いま、道徳教育の新しいパラダイムが求められている。次のことが重要であろう。

もともと道徳とは、人格の内面形成にかかわるものであると同時に、実践的なものである。何が正義で、何が善であるかをどれだけ

最近はやっている考え方としては発達主義がある。たとえば「盗んではならぬ」という規範ひとつとっても、子どもの発達段階によって道徳的判断の仕方もかわってくるから、それに応じた判断力をつけていくのが道徳教育の課題であるというのである。これは、学

年ごとに教育が行われる学校教育においては受け入れやすい考え方である。しかし、もともとあまり厳密でない、しかも平均的な「発達段階」を、多様な個性と道徳的葛藤をもつ子ども達に一律におしつけ、たぶん能力主義的になる傾向がある。

知っていたとしても、日常的な生活の中でそれを実践できなければ意味がない。さらに言うならば、非道徳的諸条件を克服していく実践をおしてはじめて道徳的意識を形成することができるのである。

内容からいうならば、受験競争や出世競争、生存競争のなかで孤立化し、しばしば対立しあっている人々が、人間的な共同性をとりもどすことが焦点である。現局面では、地域ににおける協同性と公共性を現実的に創造していくことが重要な課題である。

最後に、このような理解のうえに付言するならば、生産的实践にかかりつつ協同活動を行ってきた農民的農業は、いわゆる環境倫理の問題にとどまらず、道徳教育に対して重要な学習材料を提供しているといえる。農業関係者は、「道徳の時間」をはじめとして、学校教育にもっと積極的にいかかわってもよいのではないか。

そもそも、これまでの代表的道徳教育論は、それぞれ日本における農業の位置づけに関する理解に照応しているのである。ためしに類推してみたい。これからは、その建て前はともかく本音において、道徳も倫理もないがしろにすることになるのだろうか。